

日吉台地下壕保存の会会報

第68号

日吉台地下壕保存の会

第7回戦争遺跡保存全国シンポジウム 大分県宇佐大会成功裏に実施される。

戦争遺跡保存団体の交流のための全国シンポジウムが、今年は「神の国仏の里」大分県宇佐市で8月23～24日両日に渡って行われました。

宇佐市は全国八幡信仰の総本社「宇佐八幡宮」の宮どころであるとともに、戦争中は海軍宇佐航空隊が置かれたところで、最後の特攻隊の出撃の地でもあり、日吉とも縁の深いところです。

今回は日吉台地下壕保存の会からは7名が参加をしました。分科会などで発表し、各地の戦跡保存団体の人々と交流、意見交歓をしました。このシンポジウムは宇佐市及び宇佐市教育委員会の共催で行われ、宇佐市役所あがての準備、歓迎をしていただきました。



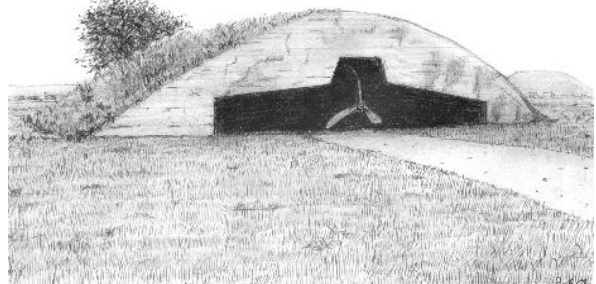
大会1日目 (23日)



23日午前の見学会では旧海軍宇佐航空隊ゆかりの戦跡をバスで見学して回りました。田や畑の中に道路として残る滑走路、点々と残る戦闘機を格納したコンクリート製の掩体壕、特攻隊の慰霊碑、機銃の弾痕、地元の人々の懇切な説明に、当時の人々の苦労を思い、やはり歴史は現地を見て、学び、感じる大切だと痛感しま

した。午後からは同市法鏡寺の宇佐文化会館「ウサノピア」で全体集會が行われました。

宇佐市長、宇佐市議會議長の歓迎の挨拶後、三菱駿武全国戦跡ネットワーク代表の基調報告が「戦争遺跡保存運動の到達点と課題2003」と題して行われました。戦跡ネットワークとして文化庁の「近代遺跡所在・詳細調査」であげられた50戦跡の他に更に蟹ヶ谷地下壕など31件を追加候補としてあげ、詳細調査を要望していること、また各地の保存団体で独自の学術的な調査が進められていること、また調査結果が各機関誌、新聞、研究誌、などに報告され、戦争遺跡に関する出版物も増え、調査、研究、理論的な深化が図られつつあることなどが報告されました。さらに文化庁の「近代遺跡の調査等に関する検討会」（会長：鳥海信中央大学教授）は各自治体からあげられた軍事に関する遺跡544件から50件を選定し、文化庁は03年度中に詳細調査をした上で、概要を03年度以降「近代遺跡調査報告書」として刊行する予定であり、その上で選定された遺跡を指定候補として自治体や所有者・地域文化財保護団体等の意向を聞きながら、史跡指定すべきかどうかの検討に入るといことです。ただし、選定されたからと言って史跡になるわけではなく、文化財としての保存状態の良好であること、地権者の同意、自治体からの指定申請など条件が揃わなければ指定実現には至らないこと。より一層の戦争遺跡に関わる市民団体の保存運動が肝要であることを強調していました。



動が肝要であることを強調していました。

記念講演は永原慶二・一橋大学名誉教授（歴史学）が「戦争遺跡と歴史認識」と題して講演をなされました。自らの学徒兵から海軍航空隊員として敗戦を迎えた体験と「わだつみ」世代としての体験から語り、自己と「国家」という観念的二極関係でしか現実を考えられず、戦争を具体的、歴史的に認識することが殆どできなかった。若者に死を命ずる戦争とは何か、国家とは何か、そうした点を歴史認識の問題として生き残ったものが問いつめていく義務があるとしています。その上で戦争遺跡は戦争への具体的理解と反省や批判への手がかりとなるが、他面戦争の美化や被害者感覚をおる一面的モニュメントにもなりかねない。そうした危険を克服し、それらを戦争を

者・地域文化財保護団体等の意向を聞きながら、史跡指定すべきかどうかの検討に入るといことです。ただし、選定されたからと言って史跡になるわけではなく、文化財としての保存状態の良好であること、地権者の同意、自治体からの指定申請など条件が揃わなければ指定実現には至らないこと。より一層の戦争遺跡に関わる市民団体の保存運動が肝要であることを強調していました。



めぐる歴史認識の基礎にまで高めるためには、まず戦争遺跡の全貌、機能などを正確に捉えること

が必要である。そして武蔵野の中島飛行機の戦争遺跡保存運動の例を挙げた上で、更に専門の中世の城址が史跡指定されても、市民がその意義を理解していないと史跡は産廃業者などによりゴミ捨て場になってしまう例もあげ、遺跡に対する市民の保存運動の持続と高まりが必要である、人々

の歴史認識は事実を深く見つめた批判精神によってのみ高まるとまとめられました。

次に地元宇佐市の劇団「うさ戯小屋」が「忘れ得ぬトロイメライ」と題して特攻隊の若者が世話になった宇佐の人々のために最後にトロイメライを引いて出撃する実話を題材にした演劇を披露してくれました。

シンポジウムでは掩体壕保存に取り組む市民グループ、豊の国宇佐市塾・平田崇英塾頭、戦跡の清掃ボランティアをする柳ヶ浦高校2年の財前恵美さん、沖縄で戦争体験者の証言をまとめた全国ネットの代表でもある村上有慶さんら5人が意見交換しました。平田さんは「20年後は今以上に戦争を知らなくなる。平和学習の場にした」と掩体壕保存を訴え、村上さんは「我々は平和の大切さを次世代に伝える責任世代である。」とし、財前さんが「戦争の悲惨さを学んで自分の子どもにも伝えたい」と話すと会場から大きな拍手がわきました。

大会2日目(24日)

第1分科会からの報告

日吉台地下壕保存の会 運営委員 富沢慎吾

初日を上回る猛暑となった大会2日目でしたが、第1分科会は、宇佐市民図書館視聴覚ホールの適度に冷房の効いたすばらしい設備の中で行われました。

第1分科会のテーマは「保存運動の現状と課題」で8本のレポートの発表と討論が行われました。午前の部の報告は①「戦争遺跡が文化財になるまで～宇治における戦争遺跡の歴史の発展」(京都)②「南風原陸軍病院壕の現在と未来」(沖縄)③「山梨県内に残された奉安殿について」(山梨)④「まだ残っていた！中島飛行機武蔵製作所の建物」(東京)⑤「豊後森機関庫の保存運動について」(記録ビデオも上映)

(大分)⑥「日吉台地下壕の保存運動～この1年間の活動と成果～」(神奈川)でした。なお私たちは横浜市立中山中学校・放送部の皆さんが日吉台地下壕の見学で学んだことを映像化したビデオ(「今私たちにできること」約8分間)は、時間の都合で午後の部の最初に行われました。午後の部の報告は⑦「歴進会のあゆみ」(大分)⑧「この一年間の活動」(東京・浅川)でした。

〈日吉台地下壕保存の会からの報告の概要〉

本会からの報告ではこの1年間の私たちの活動を4つの活動領域（〈Ⅰ〉見学会、平和のための戦争展、出版などの“戦争の実相”を伝える活動 〈Ⅱ〉調査・研究活動 〈Ⅲ〉慶応義塾・行政への働きかけ 〈Ⅳ〉他の戦跡保存運動団体との協力）に分けて報告しましたが、その全体を通じて参加者の皆さんに訴えたことは次の3点でした。

第1に、この1年間に5冊もの出版物に我が会会員が執筆したことに示されているような私たち自身の認識の深まり、視野の広がりが基礎になって、ガイド活動も充実し、その結果として、見学会のこの1年間で42回、参加者数が1700名にまで増加してきたこと。第2に文化庁や横浜市当局などへの働きかけによって、艦政本部地下壕の埋め戻し、工事も航空本部地下壕入り口のマンション建設計画が現在のところ進行がストップしていること。そして第3にこれからの活動の中で次の世代の若者たちへの働きかけを強めてきたということです。

この第3の点については、我が会の若い世代を代表して、岡上会員が報告を受け持ちました、彼は報告の中で2つの問題提起をしています。その1つは「戦争を『昔の出来事』としてではなく、現代に生きている若者の感性の中に危機感を呼び覚ますためには、むしろ〈現在〉から〈過去〉に光を当てた方が良いのではないか?」「たとえば、現在の巡航ミサイルやバンカー・バスターに匹敵するのが1944～45年の焼夷弾であった」と。この視座から見れば、戦争が『昔の出来事』ではなく、現在でもイラクやアフガンの人々の頭上に新式の爆弾がふりそそいでいることが同時に見えてきます」ということ。もう1つは、「今の私たちのまわり〔日常生活〕には情報があふれています。」「与えられている情報を鵜呑みにせず、裏にかくされた真実を見抜こう。」ということでした。

皆さん！特に若い会員の皆さん！どうお考えですか？

《緊急報告》

航空本部地下壕入り口付近の 地下室マンション建設について

（運営委員：谷藤基夫）

会報66号・緊急報告で詳細にお伝えしたように、新幹線下の航空本部地下壕の地下室マンション建設問題は、その後開発業者が建築申請を出しましたが、未だ許可がおりていない状況です。市の文化財課などが業者に対し、文化庁の調査が進行中であることを知らせ、注意を促していること、マスコミでも報道されたことなどが工事凍結の大きな理由と思われる。

保存の会では、この間地域の住民の会とも共同で世論を喚起するための活動を行ってきました。7月7日の神奈川新聞報道もその成果の一つだと思います。

航空本部地下壕は日吉台地下壕群の一つですが、未だ、きちんとした学術的調査も行われていないまま工事許可が下りれば、入り口4ヶ所が破壊される状況にあることは変わりありません。この秋以降の文化庁調査の進捗状況と市の工事許可がどうなるか、今後十二分にも注意を払っていく必要があります。尚、この問題は宇佐で行われた全国シンポジウム総会でも、報告・討議され、マンション建設の計画撤回、保存が総会決議としてなされたことをご報告いたします。

（別紙資料参照）

「追憶の中から～戦時下の日吉キャンパスを語る～」(2)

講演要旨

初代日吉台地下壕保存の会会長

慶応義塾大学名誉教授

永戸多喜雄先生

我々のグループの中に純文学派の作家志望の人がいました。安岡章太郎君です。彼は予科一年のおそらく秋ごろから一つのグループをつくりました。彼らは文学で言いますと、永井荷風のような文学を愛好していました。その中に安岡章太郎君と石山コウイチ君と小堀エンジロウ君、3人のグループがありまして、当時の予科校舎に文学部の部屋があつてそこをよく使っていました。彼らは驚くべき読書家でありまして多くの書物を読んでいました。石山君が書き残した文書によると、安岡君はフランスのシャンソンが大好きで、これも丹念によく聴いていたそうです。小堀君は私のような小柄な少年と違ひまして、大男でした。

当時の大学には、沢山の取り決めがあつて、それはそれは大変でした。それに対してある種の抵抗心もあつたのですけれども、国家自体にもたくさんの制約があつて、そちらの方があまりにも厳しかったので大学側の制約はあまり気になりませんでした。

大学1年の後半、運動会の行進曲を皆で決めようとしていたところ、「自由を我らに」という映画の歌を使おうということになりました。フランス語の歌でした。当時の時代背景への現れがそこに出てきたのでしょうか。担当の二宮先生に（最近亡くなりましたが）歌詞を教えて貰つて授業を終えた後に練習していました。その歌を實際運動会の時に歌つて行進しました。グラウンドを2周り半したときに体育会の学生に止められてしまいました。行く手をさえぎられたのです。当時戦火が増す中でフランスは敵国家。それも「自由を我らに」という歌を歌うなんてとんでもない……。

こんな時代背景だったから蚊がひねりつぶされるようなひどい目にあつたことは承知の上で……。体育会の学生に止められたとき、はつとその時初めて私たちは我に返りました。そんな中クラスメイトのひとりで体育会で活動している高松君がいました。彼が私たちに「ここは任せろ」と言つて一手に引き受けてくれたのです。一目散に私たちは逃げました。あとから思えばすまないと思っています。数日後彼が学校に来たときには見るも無惨な形に顔が変わっていました。彼にはすまないと思つたけれども「自由を我らに」という歌を歌つたことを後悔はしていません。

1941年の11月の石山君のメモには「日米もし戦わばそれまでだ」と書いてありました。それは世の中が移り変わり、それを我々は知ろうとしていたのです。中国では戦線が伸びきつて弱り果てていました。乱れに乱れていました。だから石山君はメモにそう残したわけだと思います。

そして12月8日がやってきました。しかし彼のメモには開戦されたという記録はありませんでした。「戦火が広がっただけだ」それが彼の判断だつたと思います。そのころ石山君は同人雑誌を作ろうと友達を募っていました。「同人を募る」これしか書かれていませんでした。(続く)

(文責：谷藤)

第11回 横浜・川崎平和のための戦争展2003 実施要項

1 趣旨および経緯

2年前の9月11日、多くの人は、アメリカの豊かな経済の象徴ともいえる世界貿易センタービルが崩れ落ちるのを、具体的な心身の痛みを想像すると同時に、重苦しい不安感を抱きながら、見守っていたのではないのでしょうか。とうとう人類は取り返しのつかないところまで来てしまったのか、という痛恨の思いです。しかし、その後アメリカが「テロリストをかくまっている」という口実でアフガニスタンを、「大量破壊兵器を隠しているらしい」というだけでイラクを攻撃し、世界中の多くの国に、踏絵を強いるようになりました。このような動きに対して世界中の人々は平和的な解決を求めて立ちあがり、未曾有の反戦運動の輪が広がりました。ところが、小泉内閣は無条件でアメリカを支持し、国際社会の中で、孤立の道を歩もうとしています。「有事関連法案」などという抽象的な表現や、「イラク人道支援特別措置法」というような砂糖衣をまぶしたまやかして、国の進路を大きく変えてしまいました。大多数の国民が、まさかそちらには行くはずはないと、漠然と思っている戦争の方向にです。

今年は敗戦58年目であると同時に、学徒出陣から60年の節目の年でもあります。また、私たちが「私の街から戦争が見える」という基本方針で続けてきた、「横浜・川崎平和のための戦争展」も11回目となりました。横浜と川崎に一年毎に開催場所を移してきた慣例からすれば、今回は川崎の番ですが、昨年同様、慶応大学日吉キャンパスで行います。慶応義塾の「学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」—空間と人間—」との共催であることと、このキャンパスは60年前に学生が軍隊へと駆り出され、その学び舎を海軍の中核機構が使用したという、二重の意味をもつ戦争遺跡であるからです。

桜井準也慶大助教授(考古学)の講演「日吉台海軍連合艦隊地下壕の学術調査報告」と、山田 朗明大教授(日本近現代史)の講演「連合艦隊 陸にのぼる」は、まさにこの場で聴くに、最も適した内容をもつと思われまふ。また、今年も何人かの若者が、自分の活動や研究の中から見つけた平和への取り組みを発表します。

展示としては、日吉台地下壕・登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕の写真パネルや、戦時下の学園生活や世相をあらわす写真と資料(実物をふくむ)などがあり、19日から25日まで行います。日吉台地下壕見学は25・26日の午前中、登戸研究所跡は11月9日に、東部62部隊跡は11月30日のいずれも午後に見学会を開きます

二度と若者を戦場に送り出さないために、私たちは何をすべきか、そして何をしなければならないのか、戦争を問い直し、平和をどう創り出すのか、私たちみんなでお恵を出しあいましょう。

2 テーマ 「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」—学徒出陣60年—

3 主催・後援・実施団体

主催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会

日吉台地下壕保存の会

慶應義塾日吉学術フロンティア—空間と人間—

- 後援 神奈川県（予定）・横浜市（予定）・横浜市教育委員会（予定）
実施団体 日吉台地下壕保存の会
川崎平和ウォーキングマップ作り実行委員会
蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会
- 4 実行委員会代表 白井 厚（慶応義塾大学名誉教授）
大西 章（日吉台地下壕保存の会代表 慶応義塾高校教諭）
副代表 新井揆博（蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会代表）
須田輪太郎（人形劇作家）
渡辺賢二（明治大学講師 歴史教育者協議会事務局長）
- 5 開催日程 2003年10月25日・26日 午前10時～午後5時
（展示は10月19日～25日）
- 6 会場 慶応義塾大学日吉キャンパス来往舎
（26日の会場は変更あり 当日来往舎に変更場所を掲示）
入場無料（地下壕見学会は資料代500円）
- 7 内容
- (1) 展示 10月19日～25日（慶応義塾大学来往舎ギャラリー）
日吉キャンパスを中心に戦時下の青春像を明らかにする写真や実物
（学園生活 学徒出陣 戦没者の遺品 当時のポスター他）
戦争遺跡（日吉台地下壕・登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕）の写真パネル
- (2) 講演・シンポジウム
- 25日（慶応義塾大学来往舎中会議室2階）
午後1時30分～2時30分
「日吉台海軍連合艦隊地下壕の学術調査報告」
桜井準也氏 慶応義塾大学助教授 考古学
2時30分～4時
「若者からの提案 体験を受け継ぎそして平和を創る」
- 26日（慶応義塾高等学校B棟3階）
午後1時30分～3時30分
「連合艦隊 陸にのぼる」
山田 朗氏 明治大学教授 日本近現代史
- (3) フィールドワーク
日吉台地下壕見学 25・26日午前10時～12時（事前予約必要）
- 8 関連行事 戦争遺跡を歩く・みる・ふれる —ピースロード多摩丘陵—
11月 9日（日）生田を歩く（登戸研究所ほか） 午後1時～4時
11月30日（日）宮崎台を歩く（東部62部隊跡ほか） 午後1時～4時
（参加希望者は往復葉書にて連絡先まで申し込んでください 資料代500円）
- 9 運営 実施団体で実行委員会を組織し運営にあたる
- 10 連絡先
〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 (045-561-2758) 亀岡敦子

●活動の記録

2003年7月～9月

- 7/2 第2回運営委員会(慶応高校物理教室)会報67号発行
 7/3 地下壕見学会 福寿草会 14名
 7/6 地下壕見学会 東京労働者学習会議 20名
 7/19 地下壕見学会 日吉台西中学校PTA成人委員会 29名
 7/24 平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会(法政第二高校)
 7/27 定期見学会 37名
 7/29 地下壕見学会 昭島市平和施設見学会 48名
 8/8～10 平和のための戦争展 in よこはま 展示参加
 (神奈川県民サポート・センター)
 8/10 地下壕見学会 JR東労組蒲田電車区分会・シニア会他 15名
 8/20 地下壕見学会 コープかながわ南区委員会他 50名
 8/23～24 戦争遺跡保存全国シンポジウム宇佐大会 参加7名
 8/27 平和のための戦争展横浜・川崎実行委員会(法政第二高校)

★予定 9/16 第3回運営委員会 会報68号発行

■地下壕見学会の予定 9/28(日) 定例見学会

10/25(土)・26(日)

▲毎月第4日曜日に予定していますが、変更もありますので、必ず見学窓口に申し込んでください。(TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

◆8/21～9/23は地下壕入り口付近の工事のため、見学会はお休みします。

連絡先(会計) 白鶴邦子: 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

(その他) 喜田美登里: 港北区下田町2-1-3 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://www.geocities.HeartLand-Hanamizuki/2402>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西 章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

編集 日吉台地下壕保存の会

運営委員会

昭和20年2月1日 午前、飛行作業。いくらか空中観念をとりもどしてきた。風ほとんどなし。ほそい銀色の駅館川、周防灘、国東半島、南は別府湾、すべて薄がすんで、春の立つ気配である。空からの眺めをたのしむ余裕も多少でてきたようだ。午後雨になる。飛行作業ヤメ。雨、夜まで降り続く。

(阿川弘之「雲の墓標」より：宇佐航空隊が舞台となる1特攻隊員の日記文学)

昭和17年、2年生になりました。いくつかのグループでそれぞれに育っていったわけです。最初は一日だけ軍関係の工場に行きました。我々が行ったのは小田原の工場でした。一日そこで作業をさせられました。2年生になると友人つきあいの深さが深まって行きます。私はサグリ君という人物と親しくして始めました。彼は定年まで慶応でフランス語の教員をしていました。私も彼もフランス文学を好んで読んでいました。昭和17年にもなるとだんだん先生方も元気が無くなってきました。しかし当時ヒットラーの記録を嬉しそうに翻訳していた教授も中にはいたようでしたが……。私の日記にこのころの記録が残っています。「高橋ヒロエ氏の話。私は学校に勇んで来ることができない。学生に覇気がない。願わくば私は村長になりたい。田舎の青年は諸君より生き生きしている。」と愚痴をこぼしていた、と書かれています。

さてまた話は戻ります。それから1ヶ月もたたないうちに「青馬」というタイトルの同人雑誌が発行されました。さきほどあげた3人の出版です。我々の同級生であったほかの人の名前も連ねてありました。それから昭和18年の2月には第2号が石山コウイチ君の詩と同一の「青年の構想」というタイトルで出版されました。すぐに彼らは勢いに乗って第3号を発行しようとしていました。しかし間もなく役所から電話がありました。「こんなくだらん雑誌に非常時の紙を使わせることはできない。」そしてついに第3刊は出ませんでした。

当時刊行物への干渉はとてひどいものでした。わたしの父も記者でした。父は警察から前科一犯を受けました。結婚観について書いた記事でした。

日吉の学生寮の機関誌「くるみ」という雑誌に載った内容がけしからんと神奈川県から呼び出され、こんなもんはのせるなど、寮の学生の書いた機関誌の制作文まで削除されました。学生が書いた文章まで審査されていたのです。

やがて太平洋戦争に突入しミッドウェイ海戦がありました。それが終わった後で休暇で帰ってきたのですが、日本軍がやられてしまったという話を聞きました。予想通りになってしまっているなど私たちは嘆きました。

夏休みにはいるか入らないか・・・7月でした。海軍航空隊が厚木に基地を作るということで地ならしに行きました。その前にあらかじめ身体検査を医学部で行い、AとBにあてられた健康な人がそこで地ならしをしました。私はそこには漏れました。授業というのは勤労先に講師が出張して、そこで講義をしていました。予科も半年短縮されて、三田には秋に行くことになりました。

徴兵猶予がなくなると発表されたのが10月の始めで、陸軍の方はすぐに入営ということでした。10月からわずかな期間に徴兵検査を受けて、それぞれの運命が決められました。それに漏れた人達は勤労奉仕をするというものでした。日吉に関してはそれくらいのことしか私にはなく、別の人がここに話に来て欲しいと思っています。

19年秋に海軍の多くがこの日吉にやってきました。その後、この日吉キャンパスが再び使えるようになったのは昭和24年の12月くらいでした。今この来往舎が立

っているところには藤原工業大学の校舎が何棟も建っていました。しかし殆どが焼けてしまいました。三田も50%焼けました。そんなわけで再びこのキャンパスにやってくるのは昭和24年になってしまいました。

話がだんだんと飛び飛びになってしまいご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。申し上げたいことはいっぱいございますが、あまり話すと分散してしまいますので、ここで話を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(文責：谷藤)